

いからし あやえ

五十嵐彩絵さん

女性技術職としての仕事も
生活も楽しむ



平成2年生まれ。新潟市出身。
長岡工業高等専門学校 環境都市工学専攻を卒業後、株式会社ネクスコ・メンテナンス新潟へ入社。長岡事業所で3年勤務し、その後NEXCO東日本 新潟支社へ出向。今年度より現在の新潟事業所 保全課へ異動。
趣味は旅行と音楽、最近はゴルフの練習。

目に見える成果のある仕事

「長岡高専から社内初の女性の技術職採用となった五十嵐さん。理系、特に土木や建設関係は男性のイメージが強いけれど、最近では理系に進む女性も多くなります。実際の職場はどんな環境なんでしょう？五十嵐さんはどんなことを思っただけまでを過ごしてきたのでしょうか？」

「高速道路の保全業務を行う（株）ネクスコ・メンテナンス新潟に入社して七年目の五十嵐さん。入社してしばらくは、学生時代にも勉強していたコンクリート等の土木に関する業務をメインに行っていました。今年度から配属された保全課では、サービスエリアなどの管理に携わっています。」

「会社全体では、道路路面やサービスのエリアの清掃から樹木の伐採や花壇の整備、舗装や橋の補修まで幅広いことを行っています。冬は除雪に関することも多いです。実際に自分が現場で作業や施工計画、施工状況の管理の仕事が多いかな」

中学生の頃は建築に興味があった五十嵐さん。理系の道に進もうと思って訪れた長岡高専のオープンキャンパスで土木の実験をしたことをきっかけに建設関係を勉強する道に進みました。

「この仕事の好きなのは、道路にしても植栽にしてもやっていることの成果が目に見えること。時間をかけて手をかけることで綺麗になるんだと分かることです。」



あやえさんの作業現場

働きやすい環境が 日々つくられてくる

会社初の女性技術職が働く職場環境づくりに。最初は会社側も手探りだったそう。しかし、そこのおかげもあり「女性の少ない職場で困ったことはありませんか」という学生からの質問に、五十嵐さんは「そんなに」と答えます。会社からの配慮と同時に期待やプレッシャーもある中で、「自分が最初だからやりたいようにやれる自由さもある」と言い切る五十嵐さんに、所長の角山さんは「うちのエースですからね」と信頼を寄せています。

現場でのトイレ事情や、日焼け対策、道路わきのフェンスを自力で乗り越えなければならぬなどのリアルな話もありつつ、「例えば上りやすい階段やグッズが出てきたりと、環境は日々改善されている」との心強い言葉。同社では、五十嵐さんが入社して以降技術職の女性の数が増え、今では十人弱の女性が働いています。今年初めて技術職で育休をとった方もいるそうで、「前例がないのでこれから彼女がどうやっていくのか楽しみ」と話しました。働きやすい環境を自らつくるために、女性同士の情報共有やネットワークづくりを欠かしません。

自分が最初だと自由にできる 家族に会える新潟

暮らしやすさと家族の存在

「地元である新潟で働き続ける」という選択肢についてはどのように考えているのでしょうか。

「私は自分の育ったところで仕事したいと思っていました。地元に貢献している満足感も得られるし、仕事に気持ちも入る気がします。それに、親は新潟市、祖母は見附市に住んでいるので、新潟事業所でも長岡事業所でも、すぐに家族に会いに行けるのは私も家族も安心しますね。」

職場の近くで暮らしていて、休日は友達と飲みに行ったり、買い物をしたり、旅行に行ったり、ゴルフも始めたりにしています。



友達とフェスに参加したときの写真

「新潟市はお店の選択肢も多くて、暮らしやすいです。県外出身で転勤で新潟に来た友達も、新潟は人が優しいし食べ物がおいしいからずっといたいと言っています。」

大学生へのメッセージ

今後は、今年度から携わっている植栽部分についてのステップアップに加えて、会社で行っているさまざまな他の業務にも関わっていきたいという五十嵐さん。「学生時代に学んだ知識そのものよりも目の前のことに取り組むときのひとつひとつの姿勢が自分をつくらせていると感じています」と話し、大学生には「研究も忙しいとは思いますが、大学の時こそさまざまな人とならって、偏らずに考え方を広げてほしい。」とエールを送りました。



酪農から保健師へ、
そして集落での暮らしへ



からさわ もとこ

唐澤源子さん

1984年生まれ。新潟市出身。新潟市保健師。福井集落で土地に根ざした暮らし方に出会い、家族で移住。田畑や古民家保存も含め、集落での暮らしをより楽しもうと考えている。

いろいろを囲んで
お話ししました



酪農への興味

新潟市西区で生まれ育った唐澤源子さんは、農業の持つ家庭的な雰囲気は憧れ、高校一年生の時にはすでに知人の紹介で岩手の牧場に1週間泊まり込んでお手伝いをするほどでした。

「当時の私には酪農がすごく素敵に見えました。『農業が好き』というところだけで喜ばれたことも嬉しかったです。しかし『もっと知りた』と1か月泊まり込んだ2年生の夏に、障がい者雇用や環境への配慮など、それまでには見えてこなかった課題が多くあることに気づきました。まずは農業のことをしっかり勉強しようと、帯広畜産大学へ進学。入学前から放牧の研究をしている先生を調べ、大学では牛の世話に明け暮れました。

本当の健康とは、生き生きと生活すること

農村をまわる仕事と
「健康」

卒業後、出版社に就職し、農家向けに雑誌の営業をした唐澤さん。「農業について大学で学ぶうちに、もっと幅広くいろんな農家を知りたいと思ったのがきっかけ」。年中旅団生活で、日本中の農家を訪ね歩きました。その時にある養豚農家と出会います。「実はほぼ目が見えない農家さんで、それを知らずが、営業に行ってしまったのですが、わずかに見える部分で一生懸命読んで、雑誌を買ってくださったんです」。唐澤さんは、「障がいがあっても自分の役割を担って、勉強までして前向きに生きていることを素敵に思った」と振り返ります。

農家は多くが高齢者。体力も健康も若い人にはかないません。しかしそれでも多くの高齢の元気な農家に会うたびに、「病気がどうかよりも生き生きと楽しんで生活しているかどうか」「健康」を左右するのでは」と思うようになりました。そこで唐澤さんは仕事を辞めて保健師を目指すことを決意。熊本の学校へ通い、保健師の資格を取りました。

新潟へUターン

保健師として仕事を始める場所は、実家のある新潟市を



選んだ唐澤さん。「私は一人っ子な上に親戚も新潟にいません。両親が高齢になった時のことを考えると、新潟に戻るのも悪くないかなと思って」と「ターンを決意しました。

保健師の主な仕事は地域住民の保健指導や健康管理。乳幼児から高齢者まで幅広い世代と関わり、健康増進や生活の質の向上をサポートします。健康に課題を抱える人を訪問して相談に乗ったり、育児相談会を開いたり、地域全体を見て仕組みをつくっていくことが仕事だそう。

「どんな時にやりがいを感じますか？」という大学生の質問に、「私が関わっていた方が、ずっと悩んでいたのにちよっとしたきっかけで変わって、再び自分の人生を歩み始めたときかな。人間はたくましいなあと思いました」と語る唐澤さん。

「まきどき村」と集落の暮り

新潟に戻り、保健師という仕事とは別に

唐澤さんがやりたいと思っていたことが、「畑」でした。場所を探していたときに、偶然、実家近くの書店の店主が主催していた「まきどき村」という畑づくりのコミュニティを紹介してもらい、通い始めることに。

「まきどき村」は西蒲区の福井という古くからの農村集落で行っている活動。集落の外から通う若い人もいます。同じくまきどき村のメンバーである夫と出会い、結婚し、2年前には福井集落へ引っ越ししました。

「結婚直後に住んでいたアパートは、隣の人の顔もわからなかった。でも集落では顔も分かるし、子供の名前も覚えてもらえるし、おすそ分け文化もあって本当に楽しい」と唐澤さん。お祭りやしめ縄づくり、蛍の川の保全など、集落の中ではさまざまな活動が行われています。「この地域は、住んでいるところを自分たちの力で良くしようとしているところがとても魅力的。新潟市の中心部にも遠くないので住みやすいです」と語ります。

暮りしの知恵をつなぐこと

唐澤さんはこれから育児を終え、仕事に復帰する予定です。「職場はサポート制度も整っていて、育児中の先輩の話なども聞いて復帰後の生活を少しイメージすることはできますが、仕事と育児の両立には実は不安もあります」と正直に話します。

「でも、仕事と育児のほかに、まきどき村の活動も頑張っていきたい」と意気込む唐澤さん。「おととし、田んぼを手植え手刈りで始めました。それは、昔の知恵や技を少しでもつないでいきたいから。下の世代に伝わっていないことって結構あるんじゃないのかな」と、農村で暮らす中で感じていることを語ってくれました。



←唐澤さんの記事全文はこちらから読めます

いろいろを囲んで畑でとれたものを食べる「まきどき村」の風景。家族のような雰囲気

